

独仏の国境地帯

1976年我が社はカタール石油省からエチレン装置に付帯するユーティリティー及びオフサイト設備の建設工事を受注した。ユーティリティーと言うのは電力、スチーム、海水、工業用水、圧縮空気などの所謂用役を作る装置であり、オフサイトと言うのは、本体のエチレン製造装置をオンサイトと言うのに対して、海水の取水、製品のタンクや固化装置、ヤード内の配管などを扱う付帯設備である。

最終的なプラントのオーナーはカタールの石油省であったが、プラント全体の設計や製品の買い取りなどを担当するのがフランスのCDFと言う会社で、エンジニアリングや建設のコンサルタントとして我々が直接接する客先であった。所が、直接の客先であるフランス人の当時の日本に対する知識は、芸者ガールと人力車くらいしかなく、日本で自動車、ポンプやタンクなどが作れるなどとは夢にも思っていなかったようで、受注後最初のカタール、フランス及び日本人の3者によるキックオフミーティング（最初の会談）でフランス人の「田舎っぺ」ぶりが暴露してしまった。特に会議に出席したフランス人10人の中で契約上の公用語である英語を話せる人が1人しかおらず、カタールの石油相が会議の席上怒り出し、CDFに対して「この仕事を続けたいなら、お前たちが英語を話せるようになるか、または英仏の通訳が出来るエンジニアリング会社を間に入れなさい。」と命じたため、CDFはベルギーにあるアメリカ資本のエンジニアリング会社を我々の下に付けることになった。

しかし、このベルギーの会社も上層部は英語を話すけど、一般のエンジニアの英語はお粗末そのもので、我々は彼らの英語を「芋掘りイングリッシュ」と呼んでいた。他人のことを田舎っぺなどと呼んでいても我々だって田舎っぺだったから、カタール、フランス、日本、それにベルギーの4者の田舎っぺがプロジェクトを開始したと言う方が正しかった。

我々は先ずベルギーのリエージュ（Liege）と言う所にエンジニアリングオフィスを構え、最終客先のいるカタール、フランスの客先の首脳部のいるパリ、フランスの客先のエンジニアリング部隊のいる独仏国境の街サンタヴォルト（St.Avoid）、ベルギーのリエージュ、それに日本国内調達を行う横浜の5か所を転々として仕事を進めて行った。

話は変わるが、我々が子供の頃のテレビ番組にローンレンジャーと同時期にコンバット言うアメリカのテレビ番組が放映されていたのを覚えている方も多いと思うが、コンバットはアメリカの陸軍歩兵連隊がパリを出発してドイツの国境に進軍していく過程の人間模様を描いた作品であった。私は何故か出演したリック・ジェイソンとヴィック・モローと言う俳優の名前だけ記憶している。

そのTV映画に登場する地名、ナンシー、メッツ、ザールブルッケンなどは独仏の国境に近い都市で、サンタヴォルトを含めて第2次大戦の激戦地だった。この辺りは歴史的にドイツとフランスの間で領有権を争ったアルサス—ローレン地方で、現在の国境は大戦後、住民投票によって決まったものである。サンタヴォルトはドイツの国境から数100m入ったフランス領であるが、ここで働く従業員はドイツ、フランス両国の労働者たちだった。

我々のエンジニアリングはこれらのヨーロッパの都市を車で行き来しながら順調に進んで行った。我々がプロジェクト遂行上必要な会議をするためにパリ、サンタヴォルトまたはカタールなどを訪れると、当然のように相手側は丁重に我々を受け入れてくれ、うんざりするくらい長時間の昼食をサービスしてくれる。とくにサンタヴォルトでは、申し訳ないくらい派手に昼食の接待をしてくれ、出張の半分の時間は昼食だったことが何度もあった。サンタヴォルトのCDFの親玉、ムッシュー、ダヴォーはフランス映画のジャンギャバンが扮したペペルモコに似た好々爺で、この昼食を仕切って毎回夕飯など見向きもしたくなくなるほどご馳走をしてくれ、仕事の話など全然せずに大談笑をしながら和気あいあいとした雰囲気づくりに貢献してくれた。

或る時、我が社の若いエンジニアが、本来なら当然避けるべき話題、第2次大戦の時のサンタヴォルトの状況を話題にしてしまった。フランス人もベルギー人も我々日本人がドイツの同盟国で彼らと戦ったのは知っているから、そんな話題が出て来ることすら予想していなかったし、我々もその若者（ばかもの）がそんな話題を持ち出そうとは思っていなかったので、一瞬大談笑が凍りついてしまった。

このときサンタヴォルトの親玉、ムッシュー、ダヴォーがこんな話をしてくれた。

「大戦後アルザス—ローレンの帰属について住民投票を行い、サンタヴォルトはフランス側になったが、勿論多くのドイツ人もフランス国籍に変更したり、ドイツに移動して行ったりした。サンタヴォルトのCDFの従業員の半数は、元はドイツ人で、戦後に事業を再開するとき大々的に人事記録を作り替える必要が生じた。記録用紙には氏名、年齢、身長、体重、頭髪の色、目の色などと言う細かな記録まで記入させるフォームがあり、CDFの全従業員がこれに記入し提出をした。ところがこのフォームの一番最後に性別を問う「Sex」という項目が入っていたため、会社は当然性別、男か女と言う回答を期待していたのに書かれていたのは何だったと思う？

殆どの回答が、ブラック、ブラウン、グレイ、ブロンド、などの色を記入してきたのには笑ってしまった。」

ムッシュー、ダヴォーの機転とユーモアで微妙な話題を回避することが出来た

が、私はその若者（ばかもの）を後で厳しく叱りつけたことだけは付け加えておきたい。

以前にも書いたが、これより前にも私は海外のプロジェクトには従事していたが、このカタールのプロジェクトは私がマネジメントの一員として従事した初めての海外プロジェクトであり、その後 30 数年の海外のプロジェクトを遂行する上での思い出に残るプロジェクトであったのでこれからも引き続きこのプロジェクトのことを書いていきたい。

しかし、性別を聞かれて「黒」とか「茶色」と回答されたのを見たらら噴出さずにはいられないだろう。立派な与太噺のネタだよ。

完